
春の教室～夏休みの教室シリーズ～

ひい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の教室～夏休みの教室シリーズ～

【NZコード】

N6464B

【作者名】

ひい

【あらすじ】

雪人、大学三年生、小春、高校一年生の春のお話です。

第一話 春の嵐（前書き）

このお話は前に投稿した「夏休みの教室」の続編です。なるべくこのお話から読んでも、前からの続きが分かるように書いていきますが、先に「夏休みの教室」を読んでおいた方が、より一層楽しめると思いますーぜひ、読んでみてください！

第一話 春の嵐

春。それは別れの季節。

春。それは始まりの季節。

春。それは……。

「そここのキミ！ ゼひ、うちのサークルに入らない？」

「私たちと大学生活を楽しみませんか？」

「今年もこの季節がやつてきたかあ……。」

俺、梶山 雪人は、大学の校舎へと続く桜並木を歩いている。毎年この時期になると、満開の桜が俺たち学生を向かえてくれる。今年の冬は暖冬だと言っていたので、早く桜が散ってしまうんじやないかと心配したが、どうやら入学式まで保ってくれたようだ。そんな桜の木が等間隔に植えられているのと同じように、新入生獲得のため、サークルの連中も等間隔に並んで声を張り上げている。「サークルに入つて友達をいっぱい作りませんか？」

「うちちは初心者大歓迎！」

風に舞う花びらに混ざつて勧誘のチラシも舞う。俺の足元にもはらりとチラシが舞い降りた。俺はそれをひょいと拾つた。テニス同好会のチラシだつた。ラケットのイラストが描かれてあつた。

「あ、それ私のなんです」

両手にたくさんの中のチラシを抱えた、こじんまりとした女の子が俺の目の前に現れた。

「……新入生つてのも大変だな」

俺は拾つたチラシを女の子に渡した。ありがとうございます、とその子はぺこりと頭を下げる。すると彼女の両手に抱えられた数十枚のチラシが、頭を下げるためにバラバラと俺と彼女の間に散らばる。

つた。

「ご、ごめんなさい」

女の子は耳まで真っ赤にして散らばったチラシを搔き集めた。俺はくすりと笑つて彼女を手伝つた。

何だか、伊東みたいだな。

きっと今は、高校の入学式に参加しているであろう、俺の大切な人、伊東 小春の顔が頭に浮かんだ。

伊東と出会つたのは高校三年の夏休み。俺の机の中に、伊東の数学の答案用紙が入つていたのがきっかけで、彼女と仲良くなつた。彼女は天然な性格のうえに、ドジっ子だった。教室のドアにぶつかったり、ラブレターと答案用紙を間違えたり。ちょっと……いや、かなり間抜けな伊東だけど、俺にとつて一番の人になつた。

「あの……？」

チラシを拾い終わつた女の子が、不思議そうな顔をして俺を見ているのに気が付いた。いかん、いかん。独りの世界にどっぷりと浸かつていたみたいだ。俺は持つていたチラシを彼女に手渡した。

「あの、もしかして梶山 雪人さんですか？」

「はい？」

急に自分の名前を呼ばれたので、氣の抜けた声で返事をしてしまつた。

「やつぱり！ こんなに早く会えるなんて、あたしつてばツイてる！」

チラシを拾つてあげた女の子が小さくガツツポーズをした。今度はチラシを落とさずにしつかりと掴んでいる。

「えーっと……？」

俺はすぐに記憶の引きだしを開けて見たが、この子の顔がどこにも見つからない。すると女の子が『知らないくて当然ですよ』と、両手に抱えているチラシを鞄に詰めて言つた。

「梶山先輩は知らなくても、あたし達はみんな知つてましたよ」

「どういう意味？」

……俺つて何かやらかしたっけ？ 急に背中が寒く感じ、サーチと血の気が引いた。真っ青な顔をした俺を、女の子はくすくすと笑つた。

「大丈夫です。悪いことで噂になつてゐるんぢゃありませんから。実はあたし、梶山先輩の高校の後輩で、佐々木 夏美なつみつて言います。

ヤマ先生からいろいろ聞きましたよ」

ヤマ先生。俺が高校三年生のときの担任だった先生だ。面倒見がよくて、他のクラスメートからも信頼されていた先生だ。

「そつか、まだヤマ先生、学校にいるんだ。……つて、ヤマ先生から何聞いたわけ？」

「梶山先輩と伊東先輩のことですよ」

『梶山先輩、伊東先輩のために頑張つてたみたいですね』と、女の子……佐々木さんは笑つて言つた。赤の他人に自分のことが噂になつているというのは、とても不愉快なものだけど、出所がヤマ先生となると怒りより恥ずかしさが頂点になる。俺の耳が真つ赤になつてしまつた。

「あたし、伊東先輩に憧れてたんです」

佐々木さんの頬がピンク色に染まつた。まるで桜の花びらが彼女の頬に溶け込んでいくようだ。

「こんなに好きな人に想つてもらえるなんて幸せだらうなつて

「い、いや、そんな特別なことしてないし」

俺は伊東のことを考えて待つてはいるだけだった。それぐらいしか俺には出来なかつた。

心臓が悪かつた彼女が手術を受けるためにアメリカへ行つたときも、その手術をしているときも、俺はただただ、彼女の帰りを待つてゐるだけしか出来なかつたのだ。

「そんな謙遜することないです。帰りをずっと待つてゐるなんて、簡単に出来るこじやないです。だからあたし決めたんですよ」

「決めた？」

佐々木さんはこくんと頷き、俺と田が合づと彼女の血色の良い唇

がきゅっと横一文字になつた。

「あたし、梶山先輩が好きなんです！」

「……へ？」

予想もしていなかつた展開に、俺の心臓が一拍だけ脈を打つこと

を忘れた。

春の嵐。それは桜の花びら、サークル勧誘のチラシ、そして恋の

嵐を引き連れてやってきた。

第一話 小春日和（前書き）

ちょっと忙しくてなかなか更新することが出来ませんでした。お待
たせしました。

これからはだいぶ、時間の余裕が出来るので、どんどん更新してい
い」と思っています。よろしくお願ひします（^_^）

第一話 小春日和

……くん

……誰だ、俺を呼んでるのは？

梶山……君

伊東……か？

ねえ、あの子は誰ですか？

へつ？ あの子？

「おはよっ」ひざこます、梶山先輩っ

「わああつ！」

勢い良く飛び起きた俺の後頭部が、佐々木 夏美の額にぶつかつた。思わずその場にうずくまる佐々木さん。

「ちょっと痛いじゃないですか！」

「「めん」「めん……」つて、あれ？」

俺はぱっちらりと瞼が開いた目で辺りを見回した。講義開始前はたぐさんの生徒で席は埋まっていたのに、今は空席が目立つ。ということは、講義はいつの間にか終わっていたのだ。気付けば、隣りに座っていた親友のコウジの姿もない。

「ぐつすり寝てましたよね」

くすくすと小さく笑った佐々木さんが俺の隣りに腰掛けた。

「あー……やっぱり寝てたんだ、俺」

ははは、と乾いた笑みを浮かべて、目の前に散らばっているノートを鞄に入れた。

「ところで、梶山先輩」

うんうとほつそりした腕を空に伸しながら、佐々木さんは俺のこの後の予定を聞いてきた。

「特に用事はないけど……」

「だったら、あたしとデートしませんか？」

くりつとした佐々木さんの両手が俺の顔を捕らえた瞬間、俺の心臓がどきりと飛び上がった。俺は慌てて胸の辺りに手をやった。

「あのね、佐々木さん。前にも言つたけど俺には……」

「小春ちゃんという彼女がいるんだからねっ」

突然、会話に割り込んできた声はユウジだった。『やつまー』と、ユウジは俺と佐々木さんの間に立つた。

「お眠り雪人は、やつと起きたのね」

「あのなあ……。何か忘れ物？」

「あ、冷たい。親友の雪人君を迎えて来たのにイ」

ユウジが手で涙を拭う真似をした。こいつお調子者な性格は高校時代から変わっていない。

「迎えについて、梶山先輩はあたしと一緒に帰るんですよ」

ぐいっと俺の腕を掴んだ佐々木さんが俺達の会話に割り込んだ。

「あ、何だかめちゃくちゃなこと言つてるし。ノリやすいユウ

ジだから、会話が変な方向に曲がっていくような気がする。

「まつ！ まあまあ雪人つたら、アタシといつ者がいながら。酷いわっ」

俺の心配は当たつてしまつた。ユウジと佐々木さんは楽しそうに

小芝居をうつ。

「までまで、話が変なことになつてる」

あわてて軌道修正をしようとしたが、二人はもう俺の届かない場所にいた。二人はさらに盛り上がり、昼ドラ顔負けの物語へ発展している。つて、昼ドラ顔負けってどれくらいドロドロしてんだよ。

「とにかくっ！」

俺はばっちゃんっと自分の両手を叩いた。じんっとした痛みが手の平の骨に伝わった。

「俺は帰るからな

「あ、待てよ。雪人に伝言」

佐々木さんと盛り上がっていたユウジが俺を引き止めた。

「小春ちゃんが桜並木のところで待ってるよ

「……は？」

「だあかあらあ、小春ちゃんがね

「そういうことは早く言えつ！」

俺は急いで鞄を手に持ち、彼女が待っている場所へと駆け出した。気持ちが焦るあまり足がうまく動かず、教室を出るまでに何回か転びそうになつた。

「……ほんと、小春ちゃんのことになると変わっちゃうんだから」

俺の後ろ姿を見てユウジが溜め息をついた。

「どうでもいいんですけど、ユウジ先輩。あたしの邪魔をしましたよね？」

佐々木さんが有無を言わせない、嫌な雰囲気を滲ませた笑顔でユウジを見た。

ユウジのやうう、そういう大事なことは早く言えつてのー。

俺は息を弾ませて桜並木へと向かつた。毎年春になると、満開に咲き乱れる桜並木。地元じゃ、ちょっとした観光スポットになつて、日曜、祝日はこの並木道だけ、一般開放されているのだ。

その桜の光景を見て息を飲んだ。

ずらつと並ぶ桜の木の下に、ちよこんと高校生が立つているのが見えたのだ。瞬間、ざあっと春の風が吹き込んで俺は思わず目を伏せた。

「梶山君」

彼女の声が風に舞い上がった桜の花びらのようひらひらと落ちて聞こえた。ゆっくりと瞼を開けるとそこには、頬を桜色に染めた彼女が恥ずかしそうに笑つて立つていた。

「ごめんなさい、連絡も何もしないで来てしまつて……」

「い、いいや、全然、全然大丈夫つ

何だか恥ずかしくて俺は目を伏せてしまつた。

実は彼女と会うのは数週間ぶりだ。高校の入学式前に一回会つて以来、お互に忙しくて会う機会がなかつた。

「でも、ケータイに連絡くれたら俺から迎えに行つたのに

「……ですよね。やつぱり連絡入れるべきでしたね」

彼女の顔が少し曇つてしまつた。ああ、俺のバカ！ そりじゃなくて、俺が迎えに行きたかつただけなんだ。

「いや、あの、気にしないで……」

俺はぽりぽりと首の後ろを搔いた。気まずくなると出る俺の癖だ。自分から気まずくしておいて、本当俺つて何も変わってないなあ。ちょっと……いや、かなり自分に幻滅する俺……。

「この後、何か予定がありますか？」

彼女の可愛い声に我に返つた俺は声を裏返して返事をした。

「何も予定がないのなら、あの

「……そうだな、久々に会つたんだし、どこか行こうか？」

俺の提案に彼女はにっこりと笑顔を返してくれた。

そうだよな。こんなことでへこんでる場合じゃない。俺達は始まつたばかりなんだから。

気を取り直して俺達は桜並木を歩き始めた。ひらひらとゆっくり落ちていく花びらの中を、俺は大好きな人と歩いてる。それだけなのに何だか幸せな気分だ。来年もまた、彼女と一緒に桜を見たい！ そう願わざにはいられない。

「梶山君の知り合いの方ですか？」

唐突な彼女の質問に、幸せに浸つていた俺は一呼吸置いて返事を

した。

「知り合いの方？」

首をかしげた俺は、すつと一点を見つめている彼女の目線の先に目をやつた。そこには一人の姿があった。その姿とは……。

「梶山先輩！」

元気に手を振る女の子、佐々木さん。その隣りには苦笑いのユウジが立っていた。

第三話 田畠（たけや）

ある程度、書き溜めしてたものを、書き直して投稿しています。

サブタイトルを付けるのは毎回、考え込んでしまいますね（ - - ; ）

「じゃ、あたしはこの本日のケーキセット。梶山先輩は何にします？」

そう言つて俺の隣りに座つてゐる佐々木さんはメニューから顔を上げた。

「えつと、雪人と俺はコーヒーで。あ、ホットでいいよ」

ユウジが俺から醸し出している空氣を察して慌てて注文をした。

「伊東先輩はどうしますか？」

「え、えつと、じゃあ私も梶山君達と一緒にで……」

「じゃ、本日のケーキセットとホットコーヒー三つで」

佐々木さんから注文を受けた店員が、頭を軽く下げて店の奥へと消えて行つた。しんつとどこか重苦しい四人の空氣に、アップテンポな店のBGMが痛々しい。

だいたい何でユウジ達がここにいるんだ？

俺はじろりと田の前に座つてゐるユウジを睨んだ。俺からの怒りの空氣を感じてゐるのか、ユウジはこのファミレスに着いてから俺と田を合わせようとしない。ひたすら、佐々木さんと伊東に話しかけてゐる。

だいたい何だ、この席順は？ どうして俺の隣りに佐々木さんがいるんだ？

席順はこうだ。窓側のシート席で、ユウジの隣りに彼女が。そして俺の隣りに佐々木さんがいる。……おかしい。どう見たつてこれでは俺の彼女は佐々木さんで、伊東がユウジの彼女じゃないか。

「なあ、なんでここにいるんだ？」

一人もんもんと考えていても仕方がない。俺はユウジに向かつて聞いた。俺から声を掛けられたユウジの肩がびくつと震えた。

「いや、ほら、大人數のほうが……楽しい……かなあ……なんて、そんなことないよねえ……」

「コウジは俺と田を含わさずに、きょろきょろと辺りに視線をばらまきながら答えた。

「分かってんじゃねえかよ。で？ なんで結局来ちゃったわけ？」

「あたしがコウジ先輩に頼んだんです」

伊東と話をしていた佐々木さんがコウジの代わりに答えた。伊東がちょっと困った顔をして俺を見た。

「頼んだって、何で……？」

「理由は簡単ですよ。あたしは梶山……」

「失礼しまーす。本日のケー・キセットを『注文のお客様？』

良いタイミングでウェイトレスがチーズケーキと紅茶、ホットコーヒー三つを持って来た。佐々木さんが『あたしです』と手を上げた。

「そうだ。あたしのことまだ話していないですね。実はあたし、梶山先輩たちの高校の後輩なんです」

ウェイトレスが席を離れて、佐々木さんは伊東に話し始めた。

「そうなんですか……」

「はい。高校のヤマ先生つて分かりますか？」

伊東がカップに口を付けて頷いた。

「ヤマ先生に梶山先輩と伊東先輩の話を聞いて、あたしすっごく感動したんです。一人の好きな人を待ち続けた梶山先輩つてどんな人なんだろうって」

ぽんつと佐々木さんは角砂糖を紅茶のカップに落とし、力チャチャと小さなティースプーンでかきませた。俺たち三人はただ黙つて佐々木さんの言葉を待っていた。

「あたし、回りくどいのは苦手だし、陰で『そこそこの』するのも嫌いなんで言いますね」

角砂糖が解けて、ほんのり甘い香りを匂わせた紅茶が佐々木さんの喉を通り、俺の喉には生睡が通った。じくっと生々しい音が体中に響いた気がした。これから続く佐々木さんの言葉に警戒せよ、と頭が鐘を鳴らしている。

「あたし、梶山先輩が好きなんですね」

「えつ？」

伊東は目を丸くし、俺はがくっと肩を落とした。コウジはと言つと、はらはらした表情で伊東と佐々木さんの顔を交互に見てくる。

「えつと……」

伊東が額に手をやつて考え込んでいる。俺はがたんとその場に立ち上がつた。

「伊東、帰ろ」

「え、で、でも」

「いいから」

俺はちらりとコウジと佐々木の方を見て店を出た。その後ろを伊東が慌てて追いかけた。

「……やばい。オレ殺されちゃつかも」

コウジの顔がみるみるうちに青色に変わつていいく。そんなコウジを目の前にしている佐々木さんは、何もなかつたように一口大に切つたケーキを口に運んだ。

「……なんでそんなに堂々としてんの？ もしかしたら雪人、夏美ちゃんのこと嫌いになつたかもだよ？」

「それなら、好きになつてもらうように頑張るだけです」

ぱくぱくと休むことなく、食べやすいように切り分けられたケーキが佐々木さんの体に吸い込まれていく。

「ユウジ先輩」

「え？」

あつという間にケーキを食べ終えた佐々木さんは、カップに残つてゐるぬるい紅茶をぐいっと飲み干した。

「あたし、どうしても梶山先輩じやないとダメなんです」

空になつたカップの底を見つめて、佐々木さんはぽとと言葉を落とした。

「梶山君！」

辺りはだんだんと暗くなり、空にはまほまほと星が顔を見せていた。

「梶山君、待つて」

「あつ、ごめん」

くつと服の裾を引っ張られて我に返った。俺の後ろには、少し息が切れている彼女がいた。

「……どこか座ろうか」

俺の目に誰もいない公園が映った。彼女はこくんと頭を下げた。心地よい春の夜風がブランコを揺らした。と同時に、ベンチに小さく座っている彼女の髪も揺らした。

「あのわ……」

俺は何から話したらいいのか、いや、何を話したらいいのか迷つた。佐々木さんは気にするなよ、勝手に向こうが言ってるだけなんだ、誤解しないでくれ……。どの言葉も何だか薄っぺらい。

「梶山君、モテモテですね」

張り詰めた一本の紐が彼女の言葉で緩んだ。

「モ、モテモテ？」

「はい。いろんな人に好かれるのは嬉しいことですね」「ん？　ん？　何だかズレてるような気がするけど。俺はちょっと首を傾げた。

「いろんな人に好かれるのは良くないですか？」

今度は彼女が首を傾げた。どうやら本気でそう考えているみたいだ。そんな彼女を見ていたら、今まで自分の中にあった、刺々しい気持ちが丸くなっていくのが分かつた。

まいったな、今彼女がすごく愛しい。

そんな感情が俺の心いっぱいに広がった。

「……俺は」

そつと彼女の手に自分の手を重ねた。小さな白い華奢な彼女の手。

すっぽりと俺の手に覆われた彼女の手は俺の手を握り返した。

俺は伊東に好かれてたら、それでいい……なんて、そんな歯の浮いたセリフは恥ずかしくて絶対言えない。でも本気でそう思つてるんだ。あの頃から、君と出会えたあの頃から。

彼女が不思議そうな顔で俺の顔をのぞきこんだ。

「梶山君の顔、真っ赤ですよ」

くすくすと笑う彼女の頭を俺は優しくなでた。

第四話 アメとムチ

「じゃんじゃん食べてね。ほら雪人、これも食べろって
くたくたの背広を着たサラリーマンや、大きな鞄を肩にかけた部
活帰りの学生達が賑わう場所、牛丼屋。少し忙しない雰囲気のなか、
俺は伊東を連れてテーブル席に座った。ここに来たのは、ある人物
に呼ばれたからだ。その人物とは……。

「ユウジ、何が目的なんだ？」

田の前に出されたほかほかの牛丼に俺は眉間にしわを寄せた。伊
東は珍しそうに俺の牛丼に見入っている。

ユウジはぱんっと両手を合わせて頭を下げる。

「いや、この前は本つ当たり悪かった！ その罪を償おうと思つてさ

「ほおーっ。その償いが一杯二百九十円の牛丼ですか。俺と伊東を
合わせても六百円にもならない。ワンコインでお手軽な罪滅ぼしで
すね。

「いやいや、計算間違ってるよ。正確には五百八十円

「そこ、威張つてんじゃねーよ！」

俺の真剣なツッコミを、ユウジはけらけらと笑い飛ばした。本當
に悪いと思つているんだろうか？ 怪しい……。

「梶山君、これはどうしたらいいんですか？」

俺の隣りでちよこんと牛丼を待つっていた伊東が、備え付けの紅し
ょうがが入つている容器を指差した。

「これは好みで、すきなだけ入れていいんだよ

ユウジが俺の代わりに答えた。『すきなだけ、ですか』と、感心
した様子で紅しょうがを見つめる伊東。太っ腹ですね……と、彼女
なら田を輝かせて言つだらう。

「小春ちゃんは牛丼屋、初めて？」

「あ、はい。そうなんです」

伊東が恥ずかしそうに笑つた。

「女の子はあんまり、こつこつとこころに来ないだろ」

伊東の牛丼がやつて来たところで、俺達は箸を取り牛丼を食べ始めた。

「そつか、そうだよね。『めんね、オレ今、金がなくてさ』『そんな謝らないでください。』馳走してもらえるだけで充分ですかから」

慌てて伊東がユウジに微笑みかけた。俺はその隣りで、けつと悪態を吐いた。

「伊東、いいんだよ、そんなこと言わなくて。たっぷり駆走してもらつんだから」

「牛丼限定だけどな」

ユウジが歯を見せて笑つた。その顔はまつさうで無邪気な少年みたいだ。こういうところがあるから憎みたくても憎めない。なんてお得なキャラしてんだか。

一口、一口と牛丼を口にかき込んで、ユウジが『そつまんば……』

と、俺と伊東の顔を交互に見た。

「雪人達って名前で呼ばないんだねえ」

唐突なユウジの言葉に、俺は持つていた箸を落として皿を丸くした。隣りの伊東も同じリアクションを取つてゐる。

「は？ 名前で呼んでるよ」

「違う違う。下の名前だよ。雪人は小春ちゃんのことを伊東って呼ぶし、小春ちゃんは雪人のこと、梶山君って呼んでるじゃん」

そう言つてみれば……。そうかも。俺は伊東に目線を移した。伊東は顔を赤くして牛丼をつづいてゐる。

「オレが彼氏を差し置いて、小春ちゃんつて呼ぶのはなんだかねえ」

「じゃ、やめればいいじゃん」

「今さら無理っ」

即答の答えに俺はがたんとテーブルから肘を落とした。

「私は全然気にしてないですよ」

牛丼を半分食べ終えた伊東が満足げな顔をした。よつぽどこの店

の牛丼が気に入つたらしい。田が爛々としている。

「私も梶山君からユウジって呼ばれてるのを聞いて、勝手にユウジ君って呼んでいますから」

「うーん、小春ちゃんみたいな可愛い子に名前で呼ばれるなんて、オレって今すつじく幸せだよお」

はいはい……と、俺はユウジを軽くあしらつた。お前は酔っ払い。素面でも酔えるユウジは伊東に話しかける。

「でもさ、小春ちゃんは雪人に小春つて呼ばれたいーって思わないの?」

「え、えーっと……」

返答に困つた伊東は、耳まで真つ赤に染めて器に付いたご飯粒をつついた。

「伊東が困つてんじやん。変な事聞くなよ」

『『『いっは気にしなくていいから』』』と、俺はユウジを指差した。ユウジが『何だと!』と声を上げた。そんな俺達のコントを見て伊東がくすくすと笑つた。

夜空にぽつぽつと星が顔を出し始めている。ユウジと牛丼屋の前で別れて、俺達は家に帰る道を歩いていた。

「今日は楽しかつたです」

俺の隣りを歩いている伊東が笑つて言つた。『そつか。そりゃ良かった』と、俺は彼女の笑顔を見て安心した。

この間の佐々木さんの告白以来、俺の心は不安定になつていた。伊東が変な事を考へていなか、悪い何かを考へていなか。前は笑つていたけれど、本当はどう思つているんだろう?

ヤキモチ、妬いてくれてたら、それはそれで嬉しいかも……。

「梶山君、あぶないっ!」

彼女の声が聞こえたと同時に、俺の両目から星が飛び出た。何が

起きたのか分からなくてしばらく時間が止まっていたが、後からじんとした痛みが額から体中に広がった。思わず額に手をやると、さっきまでなかつた違和感がそこにあつた。

「うつ、痛い……」

「電柱におでこをぶつけたんですよ。大丈夫ですか？」

彼女が綺麗な桜色をしたハンカチを差し出してくれた。俺は『大丈夫だから』と、ハンカチを彼女に返した。

日頃しない考え方をするもんじやないな。俺は腫れ物を触るみたいに額の違和感に手をやつた。指先が触れた瞬間、ぴりつとした痛みが体を襲つた。

でも日頃しない考え方のおかげで、俺はあることを思い付いた。それは、彼女を持つ男であれば必然的に考へることで……。

「こぶが出来てるかも」

「えつ、ちょ、ちょつと大丈夫ですか？」

「……分かんない。俺、鏡持つてないし、代わりに見てくんない？」

俺は彼女の目線に合つように背中を丸めた。彼女は踵を上げて心配そうな表情で俺の額に視線を向けた。

「あ、大丈夫みたいですよ。赤くなつてるけど、そんなに腫れてないみたいですね」

「そつか、良かつた……」

そう言つて俺は彼女の細い腕を優しく掴み、彼女の唇に自分の唇を近付けた。あと少しで……という距離で彼女がそっぽを向いた。

「だ、ダメです」

茹蛸みみたいに真つ赤になつてゐる。少し潤んだ瞳が可愛い。

「なんで？」

俺は離れようともせず、彼女の耳に囁いた。

「……梶山君、何だか変です」

「そう？」

「だ、だつて、最初の頃はこんな感じじやなかつた、です……よ」

「伊東がアメリカに行つてゐる間に変わつたのかも。……ね、こっち

向いて？」

そつと彼女の顎に手を掛けた。目線だけは横を向いていたけれど、ちらつと俺を上目遣いに見て静かに目を閉じた。

「可愛い……」

いよいよ彼女の桃色の唇に辿り着く、そんな雰囲気が流れたときだった。聞き覚えのある声だな……そう認識した時、俺は道の壁に持たれかかっていたのだ。

「え、え？」

意味が分からぬ。

今までの流れだと、俺は彼女と甘いささやかな時間を過ごしていくはずなんだ。

なのに、なんだこの展開は。

どうして今度は右側が痛いんだ。

「……佐々木さん？」

伊東の驚いた声で俺にタックルを決めた奴の名前が分かった。ようやくとふらつと足に鞭打つて、タックルを決めた佐々木さんの腕を取つた。

「何考へてんの？」

こればかりは笑つて許すわけにはいかない。なんてつたつて、恋入同士の甘い時間を邪魔したんだ。それを笑つて許せるほど、俺はまだ人間が出来ていない。

しかし、様子がおかしい。佐々木さんはぐつたりしていて、自分の力で立ち上がろうとしない。

「おい？」

声を掛けても返事がない。

「どこか怪我をしたのかもしれません」

伊東が心配そうに佐々木さんの顔をのぞき込んだ。俺も腕から手を放して、その場に腰を落とし、佐々木さんの様子を見た。すると張り詰めた糸が切れたかのように、佐々木さんが声を上げて泣き出したのだ。しかも俺に抱き付いてだ。

「ちょ、ちょ、と」

待ってくれよ、今隣りには伊東がいるんだよ。変な誤解されたら困るんだから。

そんな俺の心を知つてか知らずか、佐々木さんの腕に力が入る。

「梶山先輩に会いたかったんです……」

泣きじやくりながらそう話す佐々木さんの田には、白い田で遠巻きに見て いる周りの野次馬の田など一切入つていない。

「分かつた、分かつたから。泣きやんてくれよ

「梶山先輩いい……」

はいはい……と、俺はじうじょうもなくて、ほんほんと軽く佐々木さんの背中を優しく叩いた。

叩いた後ではつとした。

ちらつと俺の横にいる伊東に田線を移すと……。

「佐々木さんの家まで送つてあげたらいんじやないですか？」

何だか刺がある言い方に聞こえるのは気のせいなのだろうか。いや、きっと氣のせいなんかじやない。伊東の全身から怒りのオーラが見える……ような気がする。

「ま、待てよ。伊東も一緒に……」

「ごめんなさい。今日は早く帰らないといけないんです。じゃ、失礼します」

ペニシリと一寧に頭を下げた彼女は、さつさとこの場を去つてしまつた。

最低だ。

周りの白い田に囲まれて取り残された可哀相な俺と泣きやまない女の子。

最低なシチュエーションだ。

第五話 ふいづ

暗い夜道。俺は何故か彼女でもない、ただの大学の後輩の女の子と歩いている。

「何やつてんだる、俺。

あのまま、泣き出した彼女を放つておいても良かつたんだけど、あまりにも大声で泣くもんだから、無視することが出来ず……。伊東は伊東で機嫌が悪くなつちやつたし。

本当、何やつてんだる。

「……梶山先輩」

ぐすつと鼻をすすりながら女の子、佐々木さんは俺の服の裾を掴んだ。

「何だよ」

「……怒つてます?」

「聞かなくとも分かるでしょ?」

そりや当然怒ります。俺は女神様でもなければ菩薩様でもない。そう言つてやると、俺の服を掴んでいた佐々木さんの手が放れた。すると突然、

「お、怒らないでくださいああいい！」

どんな感情が込み上げたのか知らないが、やつと泣きやんだけ佐々木さんが、また子供のようにわめき出した。俺は慌てて佐々木さんに優しい言葉をかけた。

「わ、悪かったよ。怒つてないから。泣きやんでくれよ」

「ほ……本当ですか?」

俺は頭が外れてしまつぐらうに上下に動かして頷いた。もう何も言つまい。早く佐々木さんを帰して伊東に謝らないと。……ひょっとして、今日は厄日なのか?

いろいろハプニングがあつたが、やつと目的である佐々木さんの家に着いた。

「ありがとうございました」

まだ鼻をぐずぐずさせている佐々木さんが頭を下げた。『別にいいよ』と、苦笑いの俺は軽く手を上げて帰ろうとした。しかし、それを佐々木さんの俺を呼ぶ声が止めた。

「なに？」

「あのお願いがあるんです」

ちらつと上目遣いの佐々木さんは、文句なく可愛らしい。大抵の男ならすぐに落ちてしまうだろう。

しかし、俺は違う。

俺には伊東つていう心に決めた人がいるのだから。

「お願ひって？」

早く帰りたい雰囲気を言葉に匂わせながら素っ気ない態度を取つた。そんな俺を何とも思わないのか、佐々木さんはゆっくりと俺に近寄つて來た。

「あ、前髪に糸屑が付いてますよ」

「え？」

一瞬、俺の目は佐々木さんから自分の前髪に移つた。その一瞬、佐々木さんはひょいと背伸びをして、俺の唇に柔らかい感触を押し付けた。

「……」

何が起きているのか分からない。しかし、この柔らかい感触の正体は理解出来た。唇だ。

俺の目線がスローモーションのように自分の口元に移動した。

「……ちょ、ちょつと！」

勢い良く、佐々木さんの唇から顔を背け、体も離した。思わず、自分の唇に手をやる。

何考えてんだ、こいつは！？ 目を点にして佐々木さんの顔を見ると、佐々木さんはけろつとした表情で俺を見ていた。

「大丈夫。黙つていれば伊東先輩にはバレませんから」

これがさつきまで泣いていた子なのか？ 今は口元を緩めて笑つ

てこる。

「どうこういじだよ……」

「あたし、梶山先輩じゃないとダメなんです。だから、あたしの彼氏になつてください」

「な、何言つて……」

どうしたらしい？ どう言つたら諦めてくれる？

俺の頭には何も言葉が浮かばなかつたが、次第に伊東への罪悪感でいっぱいになつた。事故とはいえ、キスはキス。俺は彼女以外の人とキスをしてしまつたんだ。

「今、伊東先輩のこと考えてたでしょ？」

すっかり泣きやんだ佐々木さんが、俺の顔をのぞき込んだ。

「と、とにかく。俺は駄目だから。彼氏なら他を当たつて？ 佐々木さんだったら、俺より良い人に会えるよ」

ありきたりなセリフだ。だけど、今はこれしか浮かばない。……

もう帰りたい。今日は本当に疲れた。

「梶山先輩より良い人なんて……いません」

ぽつりと呟くように言葉を落とした佐々木さんの表情が、さつきまでの笑顔から悲しそうな表情に変わつた。それはとても切なくて、俺の心がぎゅうっと締め付けられた。

「佐々木さん？」

「や、やだ、先輩。何マジメな顔してるんですか？」

俺の呼び声に、はつと我に返つた佐々木さんは、悲しい表情を打ち消し、いつもの笑顔に戻つた。

「そ、そろそろ家に入らないと親がうるさいですから」

『じゃあ、また明日学校で……』と、佐々木さんは玄関のドアを開けて家の中に入つていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6464b/>

春の教室～夏休みの教室シリーズ～

2011年1月1日22時28分発行